

【活動報告】

他自治体と連携した企画展示の取組と効果

～国分寺市教育委員会共催企画展示

「史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々～」を通して

東京都公文書館 史料編さん担当

瀧澤 明日香

はじめに

近年、当館等を含め多くの文化施設が、新型コロナウイルス感染症対策による休室やイベントの延期等を余儀なくされてきた。しかし、令和4年度に入り漸く落ち着きを取り戻し、当館でも、年度当初から計画していた年2回の企画展示をつつがなく開催することができた。

本稿では、このうち、秋に開催した国分寺市教育委員会との共催企画展「史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々～」(以下「本企画展示」という。)に焦点を当て、他自治体(国分寺市教育委員会)と連携した本企画展示にて工夫した点や取組を、アンケートの意見も参考にしながら紹介し、本企画展示を通して得た普及活動の効果をまとめてみたい。



【画像1】 ガラス掲示板に掲出したポスター

1 展示概要

これまで当館が他自治体等と連携展示をする際は、他自治体等の施設を展示会場としていた。これは、新館移転まで当館に本格的な展示施設がなかったことによるが、本企画展示で初めて館内で連携展示を開催することができた。以下、本企画展示の概要と取り組みについて紹介する。

(1) 本企画展示の取組と効果

国分寺市の歴史遺産としては、古代の「史跡 武蔵国分寺跡」が最も有名であり、全国的にも知られている観光資源である。このため、江戸時代をテーマとする本企画展示がどれだけ興味を持たれるかはチャレンジだったといえる。

本企画展示の展示資料が、国分寺市域の名主等から寄贈された古文書が中心で崩し字で書かれたものが多いことから、全体的に難解で地味な印象の構成となり、一般的に受け入れにくい内容となる可能性が高いことを考慮しなければならなかった。そこで、は

じめて近世（江戸時代）の史料を見る方にも何が書かれているかわかるよう、解説するパネル等はできるだけわかりやすく丁寧に表現する、キャラクターの導入、現代情報と展示資料情報を重ね合わせて身近に感じられるような展示方法など、江戸時代の国分寺を楽しめるよう工夫した。

なお、本企画展示の主要ターゲットは、当然、国分寺市域及び周辺市域の方々としている。後述するが、結果としてアンケートの感想には、これまで注目されていなかった江戸時代の沿革等が、現在の町の境界や町名等に活かされており、実は身近な事柄の歴史であったことを知ることができたという意見が多く寄せられ、この取り組みは高評価を得たといえる。また、本企画展示から得たのは、展示内容の評価だけでなかった。本企画展示を観覧していただいた感想の中に「公文書館はなじみがなく入りづらい印象だったけれど、こういう展示があれば入りやすい」等の声を得た。本企画展示を通して地域の方々に当館を知っていただく機会を得ることができ、当館の普及活動の中においても大きな貢献をしたと感じている。

(2) 各コーナーの概要

本企画展示は、令和4年（2022）10月21日（金）から12月20日（火）まで企画展示室内で開催し、以下の3コーナーを設けた。また、これらコーナー以外に常設展示室内にて「武蔵国分寺跡の史跡指定をめぐる」というコーナー¹を設けた。

1：国分寺市になった村々

国分寺市域には、江戸時代に10の村が存在していたが、明治22年（1889）に合併して国分寺村が誕生し、現在の国分寺市域となった。本コーナーでは、国分寺市になるまでの10か村の特徴を紹介した。古文書では、検地帳や村明細帳、村絵図等の原資料を展示し、現在につながる江戸の村々の様子を知ることができる内容となった。また、このコーナーと関連して当館敷地の発掘調査報告とともに、縄文時代から昭和時代の国鉄中央鉄道学園²に至る考古資料（遺物）をご覧いただいた。



【画像2】当館敷地の発掘調査報告コーナー

2：水と生きる・水を活かす

このコーナーでは、玉川上水と国分寺市域の関わりを紹介した。中世以来の古村であった国分寺村や恋ヶ窪村が、明暦3年（1657）に玉川上水から水を確保する許可を、幕府から得た。そして、享保期（1716～1735）以降、玉川上水からの分水を利用した新田開発が進み、市域にも新たな村落が生まれていったのである。結局国分寺10か村のうち、9か村で玉川上水を引き込み、活用することになった。また、水車を使って製粉を中心とした産業にも取り組んでいき、経済を支えるようになっていった。これらを記録した文書を展示し、水の引き込み方法など具体的な仕組みを絵図や地図を用いて紹介するとともに、令和3年に発掘されたトンネル状の水路「胎内堀」^{たいないぼり}の調査概要を解説した。

3：在村文化と人々の交流

江戸時代の国分寺は、江戸との経済的結びつきにより、人々の行き来も盛んであった

ことから、江戸文化の影響を受け、在村文化が花開いた。ここでは、国分寺を代表する文化人である宝雪庵可尊（1799～1886）と本多雖軒（1835～1916）の作品や活躍を紹介した。

(3) 各コーナーの工夫

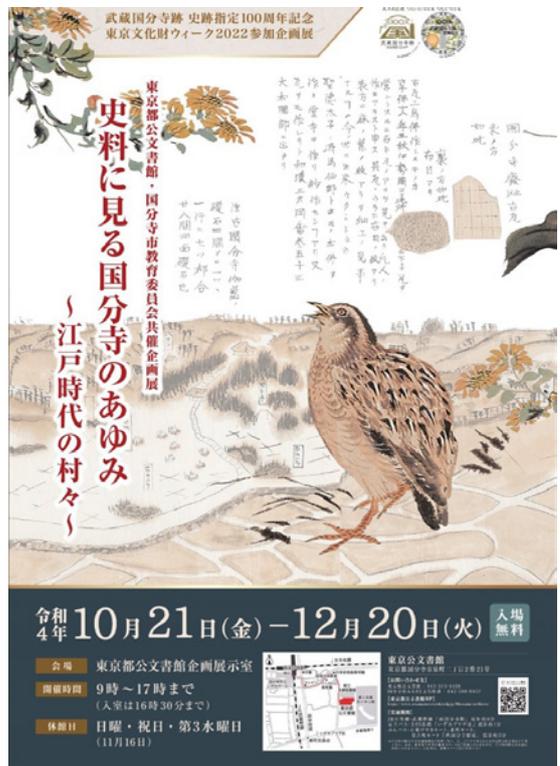
前記1コーナーでは、4m×4mという規模で制作した床面シートを製作した。令和4年1月1日に空撮した国分寺市域に江戸時代の村々を色分けした図を重ね、展示資料からみる当時の様子と現在の様子をリアルかつ身近に比較できるように演出した。多くの来観者が、シートにしゃがみこんで自分の関心のある場所を見ている姿が見られた。アンケートの中に「床面の図面が史料の場所を示しており参考になった。」という声があったことから、このコーナーの工夫が効果的だったことが分かった。大きく分かりやすい床面シートは、今後も活用していきたい。

前記2コーナーでは、玉川上水の引水の様子を、絵図や地図を使って作成したパネルから読み取れるよう、補正等を丁寧に加えながら説明した。特にこのコーナーの内容については、来観者アンケートに「非常に興味深かった」「もっと掘り下げてほしい」等の感想が記され、並々ならぬ興味を持っている方が多いことがわかった。なお、同年11月12日に開催した国分寺市主催の白井哲哉氏講演³「玉川上水と国分寺市内の分水」の感想からも同様の声があり、玉川上水に縁のある多摩地域の方々にとって非常に興味深い内容であることが感じられた。

本企画展示のポスター等で使用した“うずらとおみなえし”の絵は、前記3コーナーの在村文化人である宝雪庵可尊⁴の作品である。地域顕彰活動に取り組んだ可尊の足跡のひとつに聖護院道興歌碑と芭蕉の句碑の建立がある。これらは現在も市内熊野神社に所在しており、今回、本コーナーの担当者は、句碑等を撮影して記録文書に描かれた句碑等と比較検討した。明治時代の記録と現在の姿が結びつくことは、このコーナーの見どころの一つ



【画像3】床面シート



【画像4】ポスター（うずらと女郎花）



【画像5】3コーナーの展示風景

といえよう。また、市域の方々になじみがある本多雖軒の文書等は、関心を持って観覧している様子がうかがえた。

2 展示外における取組

以前から当館の普及活動については、“イベント力 のなさ”⁵が課題であった。よって、新館に移転後、すぐにでも面白いイベントを企画したかったが、令和2年（2019）4月に移転したと同時に新型コロナウイルス感染症対策により自粛する事態となっていた。今年度に入り漸く開催の道が開けたが、三密（密室、密集、密接）は避ける必要があった。

開催するにあたり、三密対策の他、閲覧室に持ち込みを禁止している飲料水や刃物、マジック等化学物質が含まれる筆記用具などを使わず、絵図等展示資料を見ながら楽しめるもの考えることとした。なお、参加は無料である。

そこで本企画展示では、年齢問わず参加でき展示資料をよく観覧しないと解けない“謎解き”を企画した。謎は、各コーナーから1問ずつ出題し、回答はすべて数字とし、特設コーナーの最終問題に答えて数字を並べると、武蔵国分寺跡が指定史跡になった“大正11年（1922）”となるようにした。ちなみに、当館の知名度向上をねらい、正解してもしなくても記念品（当館と国分寺市教育委員会との連携を表現したハガキや当館オリジナルグッズ）を差し上げた。

最後に、アンケートから図録が大変好評だったので紹介しておく。当館が新館に移転してから、特に力を入れているのは図録である。本企画展示の図録は、ポスターのイメージで全体構成し、内容やレイアウトだけでなく、絵図等の色合い、読みやすさを考慮した文字の大きさやフォントの使用、ルビの色を変えるなど工夫を凝らした。なお、当館の展示図録は、無料で配布している。



【画像6】 謎解きコーナー



【画像7】 連携を表現した絵ハガキ

3 連携事業としての取組と普及効果

ここで、本企画展示の連携事業としての取組と、事業を通じて得た普及効果をまとめてみたい。

(1) 連携事業としての取組

今回展示室の展示ケース（エアタイトケース）内に、他自治体等の所蔵資料を展示するのは、本企画展示が初めてであった。当館が所蔵する国指定重要文化財である「東京府・東京市行政文書」と共に他自治体所蔵資料を同時に展示するため、国分寺市所蔵資料の状態についても念入りに状態確認を行った。幸いカビ等の付着はなく、市職員と協力して塵埃等のクリーニング作業を実施した。

パネルは、当館の大型印刷機を使用して制作することから、フォントの大きさや文字

数、ポスターのデザインにあわせたコーナーパネルのデザイン、各パネルのレイアウトなどは当館の案が主体となったが、市職員にも確認をお願いした。パネルの内容については、本企画展示の担当者（3名、うち1名市職員）の文章表現の統一など一体となって取り組んでいる。また、会場装飾も連携している様子を伝えるため、市域の方々に愛着のある武蔵国分寺跡資料館のキャラクター（明日華姫ちゃん）と当館キャラクター（うさぎ、ねこ、たぬき）をイベントのパネルや装飾等に登場させ、親しみやすい空間づくりをめざした。アンケートの中に「飾りが凄く綺麗。内容がとても見やすかった。」という声をいただき、一連の取り組みについて高い評価を感じることができた。そのほか、互いの会場内に本企画展示・市開催のイベント情報を掲出するなどの広報も行っている。

(2) 普及効果について

今回連携して学んだことは、まず国分寺市（基礎自治体）の“広報力”である。東京都の組織である当館の広報手段は、ポスター等を各地域の図書館・郷土資料館等へ配布することや館内掲示がメインとなり、限定的であった。一方、国分寺市では公民館等で開催する講演会やイベントで本企画展示のチラシを配布したり、市のコミュニティバスにポスターを掲出するなど、地域に密着した様々なPRを展開し、効果を得ている。

特に効果が見られたのは、市のイベントに参加したことであった。令和4年が“武蔵国分寺跡史跡指定100周年”という記念の年であることから、国分寺市は講座・講演会等多くのイベントを開催した。そのうち、“オリジナルトートバッグ（先着順）”がもらえるスタンプラリーのイベントに、当館もスタンプ会場の1箇所として協力した。本企画展示開催初日には、イベント参加のために約100名が来館された。イベント参加者の多くは、スタンプをするだけでなく本企画展示の観覧や施設見学をしている姿がみられ、当館としては、このイベントの参加を通して、普及活動として非常に大きな効果を得ることができたといえる。

このほか、国分寺市の広報紙への告知と市長が出演したローカル番組の放映⁶、公民館での講演も効果を上げた。アンケート結果によれば、特に市が開催した公民館での関連講座の効果は大きかった。もとまち公民館にて10月5日に開催した当館西木浩一による講演⁷では、講演前に当館のPR動画を上映し、当館所蔵資料を交えながら指定史跡100周年の歩みを紹介した。同月29日、本多公民館にて開催した工藤航平氏による講座⁸は、本多雖軒をテーマとしており、本企画展示にも触れていただいた。なお工藤氏は、令和3年度まで当館の職員で、本企画展示の3コーナー「在村文化と人々の交流」の骨格を築いている。先述の白井哲哉氏の講演に至っては、当館施設の概要だけでなく、100年以上にわたって江戸東京の歴史史料を編纂してきた当館の刊行史料集「東京市史稿」についても紹介していただいた。これらの講演を通じて「講演会を見て興味を持った」という声とともに、多くの方が本企画展示に足を運んでくださった。

国分寺市は、武蔵国分寺跡という国指定史跡を擁しているため、どうしてもそこにスポットが当てられ、古代遺跡や考古資料に重点を置いている。そのため、近世・近代時代の文書を展示する機会を設けることが難しかったという。当館にとって本企画展示は、普及活動をしていく上で大きな効果を得たが、国分寺市の展示等普及活動においても、今後地域資料である近世・近代の文書が取り上げられるなど効果があればと思う。

おわりに

本企画展示を通して特に印象的だったのは、市民の国分寺に対する強い愛着だった。観光に力を入れている国分寺市の特徴かもしれないが、地域の歴史を紹介するボランティアの方たちの熱意は特に高く、講演会等での熱心な質疑や、本企画展示を何度も観覧して下さる方がいた。特に江戸時代を取り上げた本企画展示は関心度が高いだけでなく、作成配布した図録についても地域の歴史を知るための参考資料として評価していただけた。その好例として、市民の要望により市の各図書館に本企画展示の図録を配架していただくこととなった。市域の文化や歴史に対する市民の旺盛な知識欲に感服した出来事であった。

一方、「ガラスの向こうの地図や図が、視力がよくない者には見えなかった。」という声があった。文字の大きさ等キャプションは玉川庁舎時代からも課題だったが、そのときはガラス越しというシチュエーションではなかったため奥行までは考慮していなかった。見え方について改めて考える必要性があることを、これらアンケートの声から改めて感じ、これまで以上に検討していきたい。イベントでは、「謎解きは楽しみながら学べるので、引き続きやって欲しい。」という評価をいただいたが、今後は障害を持った方も参加できるイベントも検討していきたい。

当館は、これまで23区を中心に連携事業を開催してきたが、今回初めて多摩地域の基礎自治体と連携事業を行うことができた。これは、当館が移転後に強化したかった事業の一つである。本企画展示は、新館移転前から数年かけて国分寺市と調整を行ってきた。担当職員の異動もあったが無事に開催でき、また非常に好評だったことは大きな成果である。今回の連携事業を通し、他自治体等と都、互いが持つ潜在能力を引き出し、効果的に発揮させることによってより魅力ある展示を実現できることがわかった。これからの普及活動を進める上で、良い参考事例となろう。

一般的に普通に生活していく中で、“市役所”を訪れる機会に比べ“都庁”を訪れる機会はそう多くはないだろう。東京都の行政は、水道局や交通局など身近に感じるサービスもあるが、サービスを受けていても東京都の行政と認識しづらく身近に感じられない内容もあるのだろう。今回のアンケートで約50%が「東京都公文書館を知っていても利用したことがない」という回答だったことをみると、一般的にあまり利用しない公文書等の閲覧等をサービスとしている当館も、同様に縁遠く感じているのではないかと思う。アンケートには「こんな立派な施設なのに認知度が低くてもったいない。」「敷居の高いイメージがあり、用事がなければ入れないものと思っていた。」等という声も寄せられた。特に”もったいない”という声は、玉川庁舎時代から展示アンケートの中に必ずあった。この声に対するひとつの考えだが、展示を観覧して当館の魅力が伝わったことにより、この魅力が広く知られていないことが残念と感じたので、アンケートに記したのではないだろうか。当館では、こうしたご意見を参考にしながら、より効果的な展示等普及事業に取り組んでいきたい。そのためにも、他自治体等と連携した普及活動は、とても重要な活動といえ、これからも積極的に取り組んでいきたい。

最後に、アンケートの中に興味深い内容があったことを紹介したい。「多摩地域が元は神奈川だったことに驚いた。」「今後も東京都の歴史について、いろいろな展示を希望」といった本企画展示の展示内容に関する感想だけでないご意見があったことである。また、「公文書の範囲は、どの範囲の文書になるのか。この館の存在そのものを知らなかった。

どのような役割をしているのか、大切な仕事をしていることが、よくわかった。」「公文書」とは、よく判る展示があるとよい。」といった声もあった。これらは、常設展示や当館広報動画を見て寄せられた意見であろう。正に本企画展示が、当館のアーカイブに対する興味につながったわけである。

本企画展示に当たり、多大なるご協力をいただいた国分寺市教育委員会を始め、講演をいただいた白井哲哉先生、工藤航平先生、ご来場いただきました多くの方々に感謝を申し上げますと共に、厚く御礼申し上げます。

- 1 本コーナーでは、令和4年（2022）は武蔵国分寺跡が国の史跡に指定されてから100年目の節目にあたり、それを記念した展示である。江戸時代から史跡指定に至る間の武蔵国分寺跡の様子を概観した上で、史跡指定が実現した歴史的背景を探り、更に、実際に指定される前後でどのような動きがあったのかを、当館所蔵資料だけでなく、東京都教育委員会の公文書も用いて紹介した。なお、本報告書西木浩一「武蔵国分寺跡の史跡指定をめぐって」に本コーナーの概要及び論考が報告されている。
- 2 都立武蔵国分寺公園、都立多摩図書館及び当館等が位置する場所は、かつて国鉄中央鉄道学園があった。ここは、国鉄が昭和62年（1987）に民営化される際、国鉄清算事業団用地（約23ha）として東京都等に売却され、開発された場所である。
- 3 「玉川上水と国分寺市内の分水」講師白井哲哉氏（令和4年11月12日 国分寺市教育委員会主催の武蔵国分寺跡史跡指定100周年歴史講座 於：本多公民館）
- 4 可尊俳画・可尊自画賛俳画（国分寺市教育委員会所蔵）。なお、後方の絵図は、当館所蔵の「武蔵名勝図絵 第三第四」（第三、多摩郡府中領 第四、多摩郡府中領世田谷領）（請求番号：CI-228）を重ねている。
- 5 瀧澤明日香「東京都公文書館の普及啓発（展示）事業について～企画展示「庁舎の歴史」を通して見た展示の在り方」東京都公文書館調査研究年報＜web版＞第8号 令和4年3月
- 6 「長々と散歩（府中・小金井・国分寺・調布）」にて本企画展示の紹介を2022年11月16日から約半月放映された。なお「長々と散歩（府中・小金井・国分寺・調布）」は、J:COMチャンネルが配信している府中市・小金井市・国分寺市・調布市の市長が自らMCとなって我が町を紹介する番組である。
- 7 「武蔵国分寺跡の史跡指定とその背景」講師西木浩一（令和4年10月5日 もとまち公民館連続歴史講座第5回 於：もとまち公民館）
- 8 「本多雖軒と国分寺の地域医療」講師工藤航平氏（令和4年10月29日 国分寺市教育委員会主催の武蔵国分寺跡史跡指定100周年歴史講座 於：本多公民館）